

## 中島敦の病跡学的研究

塚本嘉壽\*

### 一 父母との関係をめぐって

中島の両親は彼が幼いころに離婚し、彼は二歳三か月で実家にいた母親から離れ、父方の実家で養育された。母親は「女子師範学校」を出た小学校教員であり、家庭にこもって内助の功に励むタイプではなかつたらしく、それが離婚の原因であるとも、あるいは彼女の不倫が原因であるとも言われているが、定かではない。この離婚は彼にどのような影響を与えたのか。いわゆる母性的養育剥奪は定型的には一歳ごろまでに生じるとされる。Mahlert<sup>(1)</sup>の発達理論では再接近期から個体化確立期にあたり、個性をもった自我の組織化と母親に対する情緒的対象恒常性が確立されつつある時期とされる。この時期に母親から離れるのは大きな喪失体験であろう。しかしそれが彼にどのような影響を及ぼしたかは明らかでない。たとえば母親の決定的不在は、やがて再び現れるであろう期待と結びついた安定した心内の母親イメージを毀損し、それが慢性的な空虚感（アンヘドニア）を生じさせるとされる<sup>(2)</sup>。その後の中島の性格や行動傾向によく合致するようにも思われるが、これは境界例や自己愛性人格の成因について述べられたことであって、彼がそうした人格でなかったことは明らかである。彼の場合、いや一般的にも、こうしたトラウマの意味や効果を正確に評価す

\*つかもと・よしひき、教養学部 名誉教授

ることは困難であろう。

川村<sup>(3)</sup>はこの体験に根ざすと思われる「古俗」二篇（「牛人」と「盈虚」）について論じている。まず彼は武田泰淳の評論を引く。

「子が父を憎むこと、父が子を恐れること、はては子がその父を殺すこと。これは暗い、ありうべからざるほど暗い事実だ。・・・」

中島敦の『古俗』の二篇は、わが子に対する父のこの種の恐怖をとりあつかっている。・・・」

しかし川村は、この二篇は無論、「父殺し」のテーマを扱ったものではないが、子の立場から描かれている、と指摘している。それは川村が母を奪った父（中島田人）と子との間にある深い亀裂を論じたコンテキストでこの作品をとり上げているからであり、またこの作品が弟子の側から描かれている「弟子」や「名人伝」と同じ視点であるとの判断によるからでもある。しかし素直に読めば、これらの作品は武田の言うとおり、父の側の恐怖を描いているように思われる。

二篇のうち、とりわけ「牛人」はエディプスのテーマに関連している。この作品は漱石の「夢十夜」第三夜の物語を想起させる。それは作者が盲目の子供をおぶって歩くうち、最後にその子供が自分は昔お前に殺されたと告発し、とたんに石のように重くなる、というストーリーである。この子供はすでに去勢されているが（盲目）、作者より物

事をよく知り、老成し、不思議な予知能力をもっている。作者が自らの殺人を想起した時に彼が急に重くなるのは、明らかに罪の重みを象徴している。そこではエディプス状況における父親の立場と子供の立場とが交錯しており、盲目の子供は子供であると同時に父親であり、作者もまた父親であると同時に子供でもある。精神分析という魔術的思考においては、二者が互いに交代したり一者になったりするのには極くありふれたことであり、そのための方式もさまざまに案出されている。投影、同一視、転嫁、鏡像関係、反対物への転化……。もつとも人間は他者たちの切片から構成されていること自体は明らかであるから、自他の混淆について多少の行きすぎはあろうと、精神分析に皮肉を言うことはないのかもしれない。

したがって「牛人」において作者が父である叔孫豹の立場にあるのか、庶子である豎牛の立場にあるのかは、あまり大きな問題ではないとも言えよう。叔孫豹の立場から見れば、これは目をかけていた目下の者に裏切られる恐怖を描いたストーリーであるが、趙高王莽の徒の例をあげるまでもなく、こうした「側用人」による下剋上は往時はありふれた出来事であった。それは信頼を裏切られることへの恐れであると同時に、法や秩序に規制されない暴力的なものへの恐れをも含んでいる。中島は暴力の侵害にとりわけ弱かった（「かめれおん日記」）。「ナポレオン」という小品には、「意味も目的も無い・まじりけの無い悪意だけ」がその顔に現れているナポレオンという名の悪辣な少年に大人たちが翻弄され、ひそかに恐怖さえ抱く様子が描かれている。この小品は比較的平和な結末になっているが、ナポレオンは豎牛の前身であるように見える。他方で、分析の魔術によって、豎牛が威嚇的な父親であると考えられることができるであろうか。可能ではあろうが、あ

まり得るところはなさそうである。

豎牛からみれば、叔孫豹は父親であるにもかかわらずそれを否認し、自分を家系から疎外した人間である。「牛」という名は、彼がその名の唯一の持主であったとしても、本当は名ではない（「豎」は小姓の意）。彼は単なる生物としての人間ではなく、自身に対しても他者に対しても彼自身を正確に位置づけ、その同一性を完成させ、真の人間に変換させるところの、家系内に位置された名前を与えられないのである。豎牛が復讐として二人の嫡子を殺したり追放したりし、いまた叔孫豹を殺害しようとするのも当然であろう。われわれはここに中島のエディプス・コンプレックスの投影を見るべきであろうか。

あるいは一步を進めて、近親相姦のタブーがまさに侵害されつつある事態を想定すべきであろうか。Freudはかつて乳児が母親から与えられた始原の快感の記憶痕跡を「もの」(das Ding) と称した。Lacan<sup>(4)</sup>はそれを独特の表現でとり上げ直している。それは出会うことの不可能な出会いであり、出会いそこねることを通して何かを奪われるという経験においてのみ出会われる。それは父の一名によって禁止された父親殺しという原罪の場であり、逆説的に、禁止という法がそれに根拠を与えているとも言えることができる。言葉は父の一名による禁止を引き受けることによってわれわれにもたらされたものであるから、それは言葉で語るができない。人間はそうした欠如を核心に書きこむことにおいて、主体としての自らの位置を確定することができない。こうした言葉の彼方にある「もの」の領域を彼らは「現実界」と呼ぶことになる。そして「狼男」症例や「シュレーバー」症例におけるように、父の一名が排除されることによって、主体は自己が自己であるための核心を失い、自己と世界との象徴化、言語化に失敗して、意

味世界は崩壊していく。それが精神病の世界であるとされる。

「牛人」における、天井が下降し、自分が巨大なものに押し潰される恐怖（すでに指摘されていることかもしれないが、このイメージは「断片」一にある、肋膜炎になった時の悪夢を下敷きに行っているようである）、また「真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物」「世界のきびしい悪意」といった表現は、エディプス・コンプレックスのレベールをこえて、近親相姦の禁止がもはや有効でない、この“もの”の出現の予兆を指しているのであろうか。

「牛人」に比して「李陵」における司馬遷のエピソードは理解しやすい。遷の父の談は武帝の封禪の儀式に参加できなかったことから憤りを発して倒れ、臨終に際して遷に懇ろに修史の必要を説き、遷は父の願いを実現させることを誓う。やがて彼は李陵を弁護して武帝の怒りをかい、宮刑に処せられる。遷にはよき父と悪しき父という二人の父親がおり、彼は前者（司馬談）に同一化して自己を形成する。その修史はいわゆる“喪の作業”の側面を持つている。そして常識をこえた彼の李陵弁護はエディプスの反抗であるから、いささかできすぎた話である。「孝武本紀」はその大部分に封禪書を転用しており、後人の偽作との説もあるらしいが、いずれにしてもそこには方士の言葉を信じて右往左往する武帝がやや風刺的に描かれているように感じられる。司馬遷はここで父に与えられた言葉を用いて、父に復讐しようとしているのであろうか。

「プールの傍の下で」や「断片」二におけるような弱い父親田人と、母を奪った強い父親とはここに投影されているのか。もつともこうした両個性はわれわれの誰にもあてはまるものであり、また司馬遷のエ

ピソードは「史記」や「漢書」にあるとおりの史実なのであるから、しいて彼の実生活に結びつける必要はないかもしれない。

他方、川村は父子の葛藤のみをとり上げているが、不在の母親は中島の中でどのような位置を占めていたのか。彼はこのことについてあまり語ってはいないようである。「断片」八には「・・・彼は生みの母を知らないものの淋しさを大げさに説いた・・・何故といって、彼は何物をも感じないのだから。彼の知っているのはただ『母を知らない』という事実だけであった。」という一節がある。しかし後述するように、彼は二十九歳ごろひたすら生母を恋うるような「漢詩」を作っており、やはり不在の母は彼にとつて大きな意味をもっていたように思われる。川村によれば、母チヨはわがままで、不倫したために離別された、というのが中島家側の“公式”の伝承らしい。中島はそのことを耳にしたことがあったのかどうか、離婚の原因は別にしても、母が別の家庭で生活していることを意識したことがあったのかどうか（チヨは桜庭進平と再婚し、一子をもうけたが、一九二一年、敦十二歳の時に三十六歳で亡くなっている）。筆者には「妖氛録」という短篇が、彼の母親イメージを映し出しているように思われる。陳の大夫御叔の妻夏姫は、口数が寡く、控え目で、美しくはあったが表情の乏しい、何を考えているのかわからない女であった。周囲の男たちはこの謎めいた女に魅かれ、次々に関係を持ち、彼女が謀ったわけでもないのに互いに争闘して滅びてゆく。彼女は息子がその争いにまきこまれて亡くなっても平然としており、五十歳近くなっても若い時のままである。この美しく、無関心で、人倫を知らない女性、それは母チヨのイメージに基く造形なのではないであろうか。彼女は自分を見捨ててどこか他の場所でぬくぬくと生活しているであろう。わが子に対する愛情をもたない

異様な性格者であるが、しかし若々しく美しい。ここには思慕と怨恨という、阿闍世コンプレックス風のアンビヴァレンツがあるように思われるが、どうであろうか。

## 二、狼疾について

中島は内省過剰で世間一般にうまく適応できない、他とは異っているらしき特異な自らのあり方、そのAndersseinを「狼疾」と名づけた。「狼疾」とは「孟子」の一節にある表現で、一本の指を大切にすまわり肩や背を失っても気づかぬ人を指す。細部に拘って大局を見失うというこの病いは、彼のあり方全体を指す名称としてふさわしくないようにも思われるが、以下この「狼疾」について、作品の記述に即して具体的にとり出してみたい。

「いつのころからか、彼は、自分と現実との間に薄い膜が張られて、いるのを見出すようになった。そして、その膜は次第に、そして、ついには、打破り難いまでに厚いものになって行つた。彼は、その、寒天質のように視力を屈折させる力をもつ、半透明な膜をとおして、しか、現実を見ることができなくなつて了つた。彼はものに、現実、に、直接触れることができない。彼がものに触れ、ものを見、又は行為する場合、それは、彼の影がものに触れ、ものを見、又は行為するのである。……」

(「北方行」)

同様のことは未完の作品「北方行」を一部利用したと思われる「かめ

れおん日記」にも、さらに強いAndersseinの意識を伴つて述べられている。

「……ともかくも、自分は周囲の健康な人々と同じでない。勿論、矜持を以ていうのではない。その反対だ。不安と焦燥とを以ていうのである。ものの感じ方、心の向い方が、どうも違う。みんなは現実の中に生きている。俺はそうじゃない。かえるの卵のように寒天の中にくるまつている。現実と自分との間を、寒天質の視力を屈折させるものが隔てている。直接そのものに触れ感じる事ができない。……」

(「かめれおん日記」)

こうした離人感ほさらに、知覚の飽和性とかゲシュタルト崩壊などと呼ばれる、文字に対する違和感やそのヴァリアンテへと進んで行く。

「……丁度、字というものは、へんだと思ひ始めると、——その字を一部分一部分に分解しながら、一体此の字はこれで正しいのかと考へだすと、次第にそれが怪しくなつて来て、段々と、其の必然性が失われて行くと感じられるように、彼の周囲のものは気を付けて見れば見る程、不確かな存在に思われてならなかつた。……自分の父に就いて考へて見ても、あの眼とあの口と、(その眼や口や鼻を他を切離して一つ一つ熟視する時、特に奇異の念に打たれるのだったが)その他、あの通りの凡てを備へた一人の男が、何故自分の父であり、自分と此の男との間に近い関係がなければならなかつたのか、と愕然として、父の顔を見直すことが其の頃屢々あつ

た。・・・」

(「狼疾記」)

このテーマは後に「文字禍」として作品化される。ある文字をじつと見てみるとそれがばらばらの線の集合にしか見えなくなってくる、という体験は誰にでもあり、たとえば漱石の「門」の冒頭にもそれが描かれている。しかし中島のように強く、持続的にそれを持ちつづけ、またそれが周囲の人間や事物にまで波及するということは稀である。サルトルの「嘔吐」にはいく分これに類似した体験が描かれている。主人公ロカントンは鏡に写った自分の顔に対して、その構成部分をばらばらに知覚し、それらが美しいとか美しくないとかわれることを不思議に思う。そこには中島におけるような不安や焦燥は伴われないが、ロカントンの離人体験はそれだけ深刻であり、それ故に後にもの生々しい出現に驚愕しなければならなかったのである。

さらには、無限を前にしたおのきといった恐怖もあった。

「何でも数学的な恐ろしさであった。1を永遠に3で割って行ってもわりきれないが、どうしても自分はそれを割りきらねばならぬ運命にあるといった様な、恐ろしさ・・・」

(「断片」)

「夢の世界の中で、突然に、遠近や大小の観念が混乱しはじめる。自分に与えられた数をいつまで割って行っても割り切れない。循環小数が無限に出てくる。無限というものが実際の恐怖の感じを以て彼に迫ってくる。・・・」

(「北方行」)

何者か我に命じぬ割り切れぬ数を無限に割りつづけよと無限なる循環小数いできぬ割れども尽きず恐しきまでこの夢は幼き時ゆいくたびかうなされし夢恐しき夢

(「和歌でない歌」)

さらに彼には別の大きなトラウマがあった。

「小学校の四年の時だったろうか。肺病や、みのように痩せた・髪の毛長い・受持の教師が、或日何かの拍子で、地球の運命というものに就いて話したことがあった。如何にして地球が冷却し、人類が絶滅するか、我々の存在が如何に無意味であるかを、其の教師は、意地の悪い執拗さを以て繰返し繰返し、幼い三造達に説いたのだ。・・・三造は恐かった。恐らく蒼くなつて聞いていたに違いない。地球が冷却するのや、人類が減びるのは、まだしも我慢ができた。所が、そのあとでは太陽までも消えて了うという。太陽も冷えて、消えて、真暗な空間をただぐるぐると誰にも見られずに黒い冷たい星共が廻っているだけになつて了う。それを考えると彼は堪らなかつた。・・・彼にとって、之は自分一人の生死の問題ではなかつた。人間や宇宙に対する信頼の問題だった。・・・夜、床に就いてからじつと眼を閉じて、人類が無くなつたあとの・無意義な・真黒な・無限の時の流を想像して、恐ろしさに堪えられず、アツと大きな声を出して跳上つたりすることが多かつた。・・・」

(「狼疾記」)

同様の経験は「北方行」や「寂しい島」にも記述されている。

ばらばらの線が意味をもつ必然性がないように、この眼と口と鼻を持つ男が自分の父親である必然性もない。やや仔細に見れば、ここにはある眼、鼻、口が一人の人間（の顔）を形成する不可解さと、その人間がほかならぬ自分の父親であることの不可解さとが混在しているようであるが、それは姑く措くことにしたい。そして無限に対するパスカルの恐怖とそこに暗黙に含まれる卑小な被造性の感覚。「無意義な真黒な無限の時の流れ」の果てにすべては亡び、すべては偶然にして無意味である、という認識。それらは「狼疾記」で言われる「存在の不確かさ」という点で通じあっている。

狼疾にはもう一つの、重要な側面がある。「悟浄出世」の冒頭で、あの老いたる魚怪は言う。

「……殊に始末に困るのは、此の病人が『自分』というものに疑をもつことじゃ。何故俺は俺を俺と思うのか？ 他の者を俺とも思っても差支えなかるうに。俺とは一体何だ？ 斯う考え始めるのが、この病の一番悪い兆候じゃ……」

世界に対する不確かさの感覚は直ちに自己の存在についてのそれへと反転する。

「俺というものは、俺が考えている程、俺ではない。俺の代りに習慣や環境やが行動しているのだ。之に遺伝とか、人類という生物の一般的習性とかいうことを考えると、俺という特殊なものではなくなつて了いそうだ……」

俺というものは、俺を組立てている物質的な要素（諸道具立）と、それをあやつるあるもの、とで出来上っている器械人形のように考えられて仕方がない。この間、欠伸をしかけて、ふと、この動作も、俺のあやつり手の操作のように感じ、ギョツとして伸ばしかけた手を下した。

一月程前、自分の体内の諸器関の一つ一つに就いて……その所在のあたりを押し見ては、其の大きさ、形、色、湿り具合、柔らかさ、などを、目をつぶって想像して見た……すると、私という人間の肉体を組立てている各部分に注意が行き亘るにつれ、次第に、私という人間の所在が判らなくなつて来た。俺は一体何処にある……」

（「かめれおん日記」）

ここには文字のゲシュタルト崩壊に似た事態が生じている。

「北方行」第三篇の冒頭には、折毛伝吉が南洋の島民たちを写した映画を見ながらある不安をもつ場面が描かれている。それは多少の字句の相違はあるものの、ほとんどそのまま「狼疾記」の冒頭に使用されている。

「スクリーンの上では南洋土人の生活の実写がうつされていた。眼の細い・唇の厚い・鼻のつぶれた土人の女達が、腰に一寸布片を捲いただけで、乳房をぶらぶらさせながら、前に置いた皿のようなものの中から、何か頻りにつまんで喰べている……」

見ている中に、三造は、久しく忘れていた或る奇妙な不安が、何時の間にか又彼の中に忍び込んで来ているのを感じた。

久しい以前のことである。其の頃三造は斯ういうものを——原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、其の写真を見たりする度に、自分分は彼等の一人として生れてくることは出来なかつたものだろうか、と考えたものであつた。確かに、と其の頃の彼は考えた。確かに自分も彼等蛮人共の一人として生れて来ることも出来た筈ではないのか？　そして輝かしい熱帯の太陽の下に、唯物論も維摩居士も無上命法も、乃至は人類の歴史も、太陽系の構造も、すべてを知らないで一生を終えることも出来た筈ではないのか？　此の考え方は、運命の不確かさに就いて、妙に三造を不安にした。・・・」

（「狼疾記」）

自分がこの自分でなかつたら、という問いは何を意味しているのか。自分が別の人間であつたなら、彼が「自分」なのであろうか。悟浄は流沙河の妖怪たちの間で靈霄殿の捲簾大将の生まれかわりと思われていたが、

「・・・さて、其の昔の捲簾大将と今の此の俺とが同じものだといつていいのだろうか？　第一、俺は昔の天上界のことを何一つ記憶してはおらぬ。其の記憶以前の捲簾大将と俺と、何処が同じなのだ。身体が同じなのだろうか？　それとも魂が、だろうか？　ところで、一体、魂とは何だ？・・・」

（「悟浄出世」）

「木乃伊」という短篇ではベルシヤの部将パリスカスが、前世はエジプトの祭司であつたらしきことを記憶によつて知る。彼は前世を思

い出し、その前世の記憶の中に前々世の記憶があり・・・合せ鏡のように無限に不気味な記憶が連続するらしき事態に圧倒され、ついには狂気に陥る。それは確かに恐ろしい事態ではあるが、記憶が自己の同一性を保証するという確実さがある点で、悟浄の不安よりは救いがあるのではないであらうか。

以上、「狼疾」の諸相を概観した。若干の考察を試みたい。まず「分析的精神」によつて現実と自分とが薄い膜で隔てられている、という体験は、「体験する自己」と「観察する自己」との乖離に基く典型的な離人症状であらう<sup>⑤</sup>。木村<sup>⑥</sup>はこうした離人症状に、「もの」の認知の背後にあつてそれを支える「こと」の喪失を見た。近年岡<sup>⑦</sup>は離人症を脳器質障害と対比させて考察し、後者が普遍的な概念の使用に支障をきたしているのに対し、前者はそれを保持しているにもかかわらず、まさにそこに現前しているそれであるところのDas Disease性を把握できず、一般的なもののみが残存する世界に置かれる、と述べている。いささか往昔の実念論と唯名論との論争を想起させるようでもあるが、疾患という一種の極限状況においてそのテーマが問題になるといふことは、古くからの論争が認識機能の核心に触れるそれであつたことを示唆するものなのであらう。なおGabel<sup>⑧</sup>は脳器質障害者と統合失調症者とを物象化 (Verdinglichung) の程度に基いて対比させている。前者は物象化が欠如しているが故に具体的状況と結びついた行為しか遂行できず（範疇的態度の欠如）、後者は物象化が過剰であるために概念的普遍的なもののみが肥大する（病的合理主義）というのである。これは離人体験そのものではなく統合失調症を器質性疾患に対比させて論じたものであるが、そこでとり上げられた現実との疎隔は離人症

状に等しく、その解釈は中島の記述にもあてはまるであろう。Schmidt-Degenhard<sup>(10)</sup>は統合失調症における構想力 (Einbildungskraft) の低下を指摘するが、構想力とは外界の事物に由来する諸印象を統合する力であり、一般に諸要素を一つの統合体にまとめあげるそれであるが(「純粋理性批判」、中島の離人体験もその障害に関連していると思われる。またSchmidt<sup>(11)</sup>によれば、生きられる身体の「狭さ」による統合(Engung)が現在を構成し、その現在はまた、「二二—今—現存在—このもの—主体」(Hier-Jetzt-Dasein-Dieses-Ich)の基底をなす。主体の生きられる身体の脆弱性や危機と、文字や対象がばらばらでまとまりをなくす体験とは同一の事態の二つの現れである。

視点を變えて、この事態をシニフィアン、シニフィエの関係から考察してみたい。通常は両者の結合はゆるぐことなく、かつそれらはさまざまな階層で成立し、数多くの結合が輻輳し重畳して対象世界を構成している。この結合は時に弛緩し、シニフィアンが優越して自律性を帯びてくることがある<sup>(12)</sup>。シニフィアンの優越は両義的な作用をもつ。シニフィアンはシニフィエを分離し、意味への透過性を失い、その物質性や素材性のみが突出して、ばらばらな線の集合となる。しかし他方でそれは残存するシニフィエを自らの内に収奪して、単なる心的表象を知覚の方向に変化させようとする。前者は離人体験であり、後者は極限的には妄想知覚<sup>(13)</sup>に至るであろう。無論これは統合失調症のケースであり、中島がそうした状態にまで至っていたということではないが、そうした傾性は明らかに認められる。離人傾向はさきに引いた例から明らかであろうが、表象の類知覚化の例も認められる。たとえば彼は、伯父の詩に「蛇身」という言葉を見かけると、「蛇身」という文字がそのまま生きてきて、グニャグニャと身をくねらせて車室の

空気の中を匍いまわっている「気がして気持ち悪くなってしまう(斗南先生)」。いや何よりも文字が無意味な線のよせ集めにすぎなくなったにもかかわらず、それは「本質属性」(Wesensigenschaft)を突出させ、強固な実在性を獲得する。「獅子」という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影(「文字」)を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになる」(「文字禍」)。

さらに、中島には社会的な自己規定という側面を多くもつ「自我同一性」のゆらぎよりも、より深いレベルでの自分という存在への疑いがあったように思われる。さきに引いた、自分は身体諸器官のどこにあるのか、自分は「器械人形ではないのか」という疑問。しかも普通はそのあやつり手が自分であると考えるであろうが、彼はそのあやつり手を自分以外に設定して、自分はどこにもいないと困惑しているのであるから奇妙である。彼はパスカルと全く同様に無限を前にしておののいたが、そのパスカルはまた、「私は身体のかなにも、魂のかなにもない」と述べている。彼は

ある時はパスカルの如心いたため弱き蘆をば讚め憐れみき

と歌ったが、

ある時はパスカルの如我を探し身にも魂にも求めえざりき

と歌ってもよかったであろう。

彼はまた南洋の島民たちの映画を見て、自分も彼らの一人として生



れてくることもできたはずではないか、と考え、運命の不確かさに不安を抱く。しかし島民の一人として生れてきたはずの自分とは何であろうか。それは中島敦の「意識(?)」をもった一人の島民なのか、それとも彼とは何の関係もない島民なのか。前者であればそれはもはや一人の島民、彼の言う唯物論も無上命法も太陽系の構造も知らない人間ではない。しかし後者であればそれは全く彼ではない。そもそも自分が他の別の人間であったなら、と想像する時、別の人間である自分とは誰なのであろうか。

「悟浄出世」には彼のこの疑問を解決しようとする遍歴がユーモラスに描かれている。まず、彼はどうして自らを悟浄の立場に置いたのであるうか。中野<sup>(14)</sup>は中国人英文学者ジェームズ・フーの説を引いている。フーは「西遊記」を「ドン・キホーテ」や「ハックルベリー・フィンの冒険」と比較し、孫悟空はドン・キホーテやハックととも叙事詩的なプロット (epic plots) をにない、猪八戒はサンチョ・パンサやジムとともに田園詩的なプロット (pastoral plots) をにない、沙悟浄は禁欲的プロット (stoical plots) をになつており、沙悟浄は自らは憂鬱を秘めつつ人を笑いにさそうあのユーモリストの作者に最も近い人物なのである、と指摘している。これは適確な指摘であると思われるが、他方、心理学者であれば誰しもこの三者にKetschmerの氣質三類型を想起するであろう。直情径行で行動的な悟空はてんかん氣質者であり(才氣ばしっている点が多少異なるが)、単純で明るく世俗的な八戒は躁うつ氣質者であり、影が薄く内省的な悟浄は(統合)失調氣質者である。物語の語り手としては控え目で他の登場者の活躍の背景となり、かつそれらを距離をおいて見るといふ条件が必要であり、それは失調氣質者にふさわしいものである。またいささか先取りして

言えば、悟浄が失調氣質的存在であるが故に、中島は自らの不安を投影しえたことになろう。

さて、悟浄は捲簾大将の生まれかわりであると言われ、その当時の記憶が全くないのに捲簾大将と今の自分とで何が同じなのか、と不思議に思う。身体かそれとも魂か、と。人間の同一性は、一般に身体の連続性か記憶の連続性によつて保証されると考えられる。そしてこの両者が不十分であると判断された時にしばしばもち出されるのが、「魂」という個体原理である<sup>(15)</sup>。しかし悟浄は早くもここで魂も個体原理としては不十分であると言っている。もつとも悟浄、つまりは中島が明確に記憶と魂とを分けていたかどうかは分明でない。魂と言う直前に彼は記憶に触れており、また、同作品中で後に出てくる賢人の一人は「一つの継続した我とは何だ? それは記憶の影の堆積だよ」と言つてもいることからして、あるいは記憶と魂とを身体に対比するものとして漠然と同一視していたのかもしれない。いずれにしても自分とは誰であり、何であるのかは解決されないままである。自分はずせこのようであつて別のようではなかったのか、といった「運命の不確かさ」や「次元の異つた世界」への問い、それは「狼疾」の中でも最も核心的な問題である。

新山<sup>(16)</sup>はカプグラ症状について興味深い議論を展開している。カプグラ症状とは自らに近い人間、多くは近親者が、外見はまったく同じであるが本当の近親者ではない偽物にすりかわっている、と訴える症状である。その根拠は曖昧であり、漠然とした所作や表情や声の調子などがあげられたりするだけであるが、訴え自体は確信的で訂正不能である。通常それは重複記憶錯誤、二重身体験やソジの錯覚(カプグラ症状は他者ソジーである)、フレゴリの錯覚等と一括して妄想性

人物誤認症候群に含められている<sup>(18)</sup>。しかし新山はカプグラ症状をそれらとは別の特異な症状と考え、それを通して独特な人間の個体原理を見出そうとする。ある人物がその人物であるのは何によってであるか。それは固有名が指示するのは何かと言いかえることもできる。固有名が短縮された確定記述であるというPegge<sup>(19)</sup>の説やその変形ともいえるSearleのクラスター説では、固有名がその人間の歴史性をも含めた属性群の総体としての人間を指すとす。これに対してEysenckやPutnamらは、固有名は属性性という手がかりを介さず、直接に対象を指示すると主張する。Kripke<sup>(19)</sup>によれば、アリストテレスは「ニコマコス倫理学の著者」「プラトンの弟子」「アレキサンダー大王の師」…などの属性が全て否定されても、なお「固定指示子」としてアリストテレスなる個体を直接に指示している。他方でEysenckは別の例（エリザベス二世）で、彼女が別の生涯を送り、女王ではなく貧民になったことを想像することはできるが、彼女が別の両親から生まれることは想像できないとしている。しかし新山によれば、個体原理の起源を精子と卵子に求めるならばその精子と卵子にも固有名が必要であるし、さらにその起源である精子と卵子にも固有名が必要であり…無限遡及のはてに固有名を与えることが不適切な単純な有機物質にまで遡らなければならぬ。つまり人物の個体原理を何らかの实在する存在者の起源によって根拠づけることは不可能なのである。そこで彼はKripkeの「本質主義」を批判したSalmonの、対象からすべての属性をとり去っても残されるまさにこのものである、という性質、「このもの性 (Necessity)」なる概念をとり上げる。そして人間における起源という属性をもとり去った個体原理を想定する。それが、かねてから哲学者の永井均が主張する、实在の私が所有する全ての属性をとり去つ

てもなお私であるところのこの私——永井はそれを〈私〉と表記する——である、というのである。そしてカプグラ症状で、ある近親者の外見が全く変わらないのに変わってしまったと主張されるのは、その近親者の〈私〉である、とする。

諸属性から全く独立した、無色透明な、純粹の「このもの性」などありうるのだろうか。同様に人間にとっての「このもの性」、〈私〉などありうるのだろうか。さらに〈私〉が私にとってのみならず他者にもありうるかと想定することは正当であろうか。〈私〉というあり方を指摘した永井自身はそれを否定しているのであるが。この点は研究者間においても議論のわかれるところであろう。しかしこうした個体原理を想定すると、了解しがたいカプグラ症状が極めて理解されやすくなることもたしかである。そして当面問題になるのは、「このもの性」としての〈私〉を導入すると中島の疑問にも解答できるということである。

全く記憶のない捲簾大将と悟浄において同じなのは、その「このもの性」であるところの〈私〉である。既述の如く中島は南洋の島民として生まれてくることもできたはずではないかと考える。われわれはしばしば、自分が別の誰々であつたら、と想像する。しかし別の人間である自分とは誰であろうか。通常は現在の自分の意識が別の羨むべき、または憐れむべき人間の中に入りこみ、その栄光ないし悲惨を味わう、といった事態を漠然と想定しているのである。自分がもしアインシュタインであつたなら、宇宙の神秘を解明しえた喜びを味わつたであろうし、亡命しなければならぬ苦しみをもちたことであろう。しかしこの場合のアインシュタインとは明らかに自分であり、自分が別の人間になつたわけではない。そこで変化したのは自分の属性にす

ぎない。他方、自分がアインシュタインになりきってしまえばそれはアインシュタインその人であって、自分とは一切無関係である。ところで中島は島民として生まれてくることもできたはずではないか、と考えるが、南洋の素朴で健康な島民を羨み、自分がそのようなになりたいと願っているわけではなく、唯物論も無上命法も知らない島民を憐れみ、そのようであってよかったですと考えているわけでもない。彼はただそうでなかったことに運命の不確かさを感じ、不安に襲われるのである。彼の想定は、われわれがもし別の人間であつたら、と考えるそれとは異っている。では運命次第で中島敦にも島民にもなりえたところのものとは何か。それは何の属性もたない無色透明な「このもの性」としての彼の〈私〉であつたように思われる。そして〈私〉が中島敦という人間でも島民の一人でも、あるいは他の誰かでもありうる

貫世界的同一性が成立するのは、当然に、互いに時空間的連続性や因果関連の存在しない複数の異なる可能世界を前提しているからである。

ここにおいて「何故俺は俺を俺と思うのか？ 他の者を俺とも思うことも差支えなかりうに。俺とは一体何だ？」という自己への問いと、すべては「何故に（選択的に如何にしてではなく、根本的に何故に）その如く起らねばならぬか」（「悟浄出世」という世界への問いとは一致するかにみえる。最初の神ラーは太初の混沌ヌーから生まれたが、ではなぜ初めにヌーがあつたのか、なくても一向にさしつかえなかつたのではないか。この疑いにとりつかれて聡明なセトナ皇子は廃人になつてしまった（「セトナ皇子」）。その根源、その第一原理を知りたいという希求と、自分はなぜ自分なのか、換言すれば、〈私〉はなぜさまざま属性をもつこの「私」と結びついたのかを知りたいというそれとは、ともに無限の可能世界を前にしたおののきなのである。

筆者には、あらゆる属性を欠いた純粹な「このもの性」としての〈私〉なる概念の正否を判断することはできない。しかし中島はその類い稀な知性と、そういつてよければ病理的な心性とによつて、後に分析哲学や精神病理学が論じることになる問題を先取りしていたことは確かであるように思われる。

以上、「狼疾」の諸相をやや詳しくみてきた。彼は自分という存在に確信がもてず、自分自身にも自分の身体にも違和感、疎隔感をもっていた。彼は自分とは何かがわからないのに他人とは決定的に異ると考へ（Anderssein）、その理由を知ろうと果てしない自己分析をくり返した。彼は現実世界をよそよそしくヴェールを隔てたものと感じ、にもかかわらずそれと関わることを恐れ、にもかかわらずそれが確固たるものであることを熱望するほどに脆いものと感じていた。彼は人生を苛酷と感じ、何をしてもし不全感に悩まされ、常に空虚感を抱いていた。彼は傷つきやすく、ともすれば自分の自閉的な世界に逃げこみ、美的、抽象的、超越的なものに救いを求めようとしたが、しかしそうした自分を恥じ、異常であると感じていた。彼はかなり典型的な（統合）失調氣質者、Kretschmer<sup>(20)</sup>のサブカテゴリーを適用すれば「上品で感覚の繊細な」タイプ、そこにいく分か「形式を尊ぶ詩人」や「純粹な理想主義者」が加わつたそれであろう。

DSM-IVによつて分類すれば、失調病質や同病型は、あまりに人格の偏位を重視しているので妥当しない。むしろ回避性人格との鑑別が問題になろう。中島には対人的に過敏で外界と距離をとり、より内面に向かおうとする傾向は存在する。しかしそのために対人接触を避けることとはないし、社会的、職業的活動に支障をきたすこともなく、親しい

友人も平均的なほどには存在した。予期不安や緘黙傾向もなかった。何よりも回避性人格の単純な記述は、彼のもつ内面的な傷つきやすさとはうらはらの強力性、自己の追求にとどまらず、万事においての——たとえばラテン語の習得などまでに至る執拗な徹底性、対人場面での積極性や支配性、小説家たらしとする強い意志などなど、を含みえていない。アナクロニスティックなKretschmerianである筆者には、こうした複義性を含意した古典的な意味での失調気質(分裂気質)という表現が、彼の性格に最も適切に妥当するよう思われる。

Glatzel<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup>は内因性若年無力性不全症候群(endogene juvenil-asthenischer Versagenssyndrome, EJAS)として、いわゆる神経衰弱といわれるような状態にあり、とりわけ離人体験、体感異常、思考障害が顕著で慢性的に経過する例を、一つの症候群としてとり上げた。これらの症状は多少なりとも中島に認められるものであり、とりわけその思考障害においては、文章や言葉の意味はわかるがびつたりと実感できないこと、またそれがゲシュタルト形成能力の障害に由来するものであることが指摘されており、これらは既述の中島の体験にかなり近いように思われる。ただしGlatzelのあげている症例フランチーヨーゼフは中島よりもかなり重篤であり、中島がEJASに含まれるとは考えられない。失調性格闘には幅広いスペクトラムがあり、そこには多かれ少なかれ、神経衰弱様の側面があるが、中島はより正常に近い位置に、EJASはより病的な位置にあるというところであろう。

かつて口の悪い評論家は、私小説家たちの苦悩は勲章一つもらえば霧散する、と述べた。中島にもいわゆる自己不確実(Selbstunsicher)な側面があり、小説家としての名声や収入などの、何か確実性を保証するものを求めていたかもしれない。しかし彼がそれを得たとしても、

彼は私小説家とは異り、自己自身との乖離や自分という存在の謎に由来する苦しみを解消することは決してできなかったことであろう。

### 三. 未完成な「漢詩」をめぐる

中島の漢詩は二十五首が全集に収録されているが、川村によればそれ以外に、次のような未定稿が手帳に記されているとのことである。

今夜喘々又不眠  
 生来不識生吾母  
 病中思母愁傷久  
 病骨今宵又不眠  
 燈前翳見疲瘦手

韻も平仄もなく、同じ漢字が重複して使われており、何やら不思議な作品である。古詩としても、韻がなくては成立しないであろう。

韻とは何であろうか。無論それは詩に一定の声調やリズムを与えるものであるが、それはより以上の機能をもっている。それはもろもろのイメージの大いなる飛躍、意味にかかわらない偶然的な事象の邂逅、それによる世界の転位と豊饒化である。われわれは通常はシニフィアンシーニフィエの結合体が重畳し構造化された、意味の網状組織の中にある。韻は語音の類似や連合によってこの組織に空隙を穿ち、遠く離れたものを近接させ、異質なものを同化させる。

似たような試みは近代において、しばしば方法的にとり上げられて

きた。Breton & Ernstらのデペイズマンによる“コラージュ”という実験。それは全く無関係な二者の邂逅であり、彼らはそれを次々に連結させて奇怪な物語を創り出したりする<sup>(23)</sup>。シュールレアリストたちの言う「客観的偶然」、九鬼であれば仮説的偶然における理由のないし目的的偶然と呼びそうなこうした偶然性には、韻の効果に類似した面がある。

Deleuze-Guattari<sup>(24)</sup>も、リズムにおける異質なものの出会い、雀蜂と蘭、狒狒と猫などを対比させる。

「……雀蜂と蘭は、非等質であるかぎりにおいてリズムをなしている。……もはやまったく模倣などではなく、コードの捕獲、コードの剰余価値、原子価の増量、真の生成変化ドゥヴニール（なること）、蘭の雀蜂への生成変化、雀蜂の蘭への生成変化があつて、これらの生成変化のおのが二項のうちの一方の脱領土化ともう一方の再領土化を保証し、二つの生成変化は諸強度の循環にしたがつて連鎖をなしかつ交代で働き、この循環が脱領土化をつねによりいっそう推し進めるのだ。そこには模倣も類似もなく、一個の共通のリズムからなる逃走線において二つの異質な系列セリが炸裂しているのだ。あり、この共通のリズムは意味にかかわるとんなものにも帰属せず、従属もしない。……」

しかし彼らの騒々しい饒舌もどこか「家族的類似性」の焼き直しのような面があり、逃走線が果てしなく延長されたとしても、他方で大もとにおいて意味や類似に結ばれているのであつて、それは音のまたらす全き偶然性とは異っている。

そして、漢詩における韻の効果はそのような無限開放性を指向するものではない。それはその都度の形態化を要求する点で、むしろわが国の俳句に近い。山口誓子は芭蕉の「取合せ」という技法を再びとり上げ、それを「飛躍法」と呼んで、そこに新しい生命を吹きこもうとした。彼によれば「取合せ」とは自然の物と物とを関係において捉えることであるが、この関係とはありふれたものではなく、全く新しい飛躍を含むものでなければならぬ。それはしばしば「二物衝撃」などと言い換えられるが、ここでは異質な二者の衝撃的な出会いが期待されているのであろう。取合せの俳句は一つの出会いを描くものであるが、漢詩ではそれが重合される。この点で漢詩はむしろ連歌に近いかもしれないが、後者は意味による連合である点で前者と決定的に異っている。

任意の一例。たとえば「唐詩選」中の一詩。

節使横行西出師  
鳴弓擐甲羽林兒  
臺上霜風凌草木  
軍中殺氣傍旌旗  
預知漢將宣威日  
正是胡塵欲滅時  
爲報使君多泛菊  
更將絃管醉東籬

（岑參「九日使君席奉餞衛中丞赴長水」）

なぜ漢時の近衛軍（羽林兒）が陶淵明の閑適と結びつくのか。それは

兒と籬の音が同じだからである。またたとえば韻聯の後句（第四句）。岑參が衛中丞を驃騎や飛將軍にたとえて賞讃しようとするれば「塞邊武烈服戎夷」としてもよかつたであろうし、ぬきんでた智將であると讃えるならば「心中籌策運軍帷」としてもよかつたであろうし、眼前の光景ではなくやがて来たるべき攻城戦に思いを馳せれば「胸襟兵意略湯池」としてもよかつたであろう。こうした一種のメタパラダイグムが可能なのは、夷、帷、池といった文字群の音が旗と同じだからである。一つの原基的な音は多数の韻字を生み出し、分化させ、それぞれの韻字は自らの上に多彩なイメージ群を織り成していく。それらイメージ群は互いに無関係でありながら不思議な出会いによって照応し牽引しあい、やがてそれ自体の世界を構成する。しかしその意味的世界をコントロールし、統合している本当の中心はその背後、ないしその外部に見えない形で存在している。岑參など中国古代の大詩人たちにとって、押韻は自由における制約であつたことであろう。彼らはイマジネールを飛翔させ、たまたま擦過した韻字群を次々に、自在に使用する。しかし漢詩はコラーージュの果てしない遁走とは異り、対句においても作品全体においても、二者ないし数者が、基づけ（*Grundierung*）の機能によつてその都度一つのゲシュタルトを構成し、その完結性によつて一篇の詩は再び現実世界に還帰する。そしてこの完結性をもたらすものは原基的な音である。

他方、現代の日本人が作詩を試みようとするれば、押韻は制約における自由として機能する。われわれは韻字に拘束され、イマジネールを作動させると同時に韻字を考慮しなければならぬ。最悪の場合には、韻字に予め備給されているイメージ群を選択、排列するという安易な仕方で作詩することになるかもしれない。とはいえこのような場合で

も、偶然的な事象の邂逅や詩趣の飛躍といった韻字の特質が失われることはないであろうが。いずれにしても現代の日本人にとって作詩とは何よりも韻字への意志、その獲得への指向である。

さて、中島の問題の「漢詩」であるが、そこには押韻への意志が全く存在しない。それ故にこの「漢詩」は実は漢詩の未定稿ではないと考えられる。川村は漢文文化の男性的な感慨や慨世の志を詠う漢詩表現にはなじまない、ある意味では女々しい母への思慕を、中島はあえて漢詩作品の中に詠みこんでみようとしたり、と指摘する。そしてそれは自分の不幸が母性喪失の喪失感に基いていることを彼が自覚していたからであり、〈狼疾〉のよつて来たる所以、それを追求しようとしたのが中島の漢詩創作の意味であつたとしている。

しかし管見では、この未定稿を漢詩の前形態と考えるのは誤解である。漢詩風な表現は日本語でないという間接性によつて、また委曲をつくしえない孤立語であることによつて、彼にとっては、女々しい感情や俗物的欲求などをあまり恥じることなく表出するのに適した言葉だつたのではないであろうか。それは私的な文章、日記や断片的雑記などで、われわれもしばしば書きにくい言葉を外国語などで表記することに似ている。同じく間接的といつても、漢文はどうしても説明的になるので、漢詩のように核心部のみを簡潔に提示し、しかも各行間にある程度の断絶がある形式の方が、書き手にとってはより抵抗が少くない。加えてそれには箇条書きのように内容を整理して提示する利点もある。つまりこの未定稿は漢詩の前形態ではなく、苦しく弱つた心情を書き記したメモなのである。その苦しみが漢詩的な詠嘆調をとつて表現されたということはありうることである。しかしそれはどこまでもメモなのであつて、漢詩の未定稿ではない。彼の苦しみはよく

理解できるが、漢詩作品のなかに女々しい感情をあえて詠みこもうとした、という指摘は、深読みすぎるとは思わないであらうか。

## 結語

この小論では中島敦を病跡学的に考察した。まず「牛人」や「妖氛録」に父母との葛藤が投影されている可能性に触れた。次に彼の「狼疾」はKretschmerの言う意味での失調気質に基くものであることを指摘した。最後に漢詩の未定稿とされている作品について、押韻への意志の欠如という点から、それは漢詩の未定稿ではなく一種のメモと考えられることを述べた。

## 文献

- (1) Mahler, M. S. et al. (高橋雅士他訳)「乳幼児の心理的誕生—母子共生と個性化」黎明書房 1981
- (2) Hartocollis, P. : Affective disturbance in borderline and narcissistic patients. Bull. Menninger clinic. 44 : 135, 1980
- (3) 川村湊 「狼疾正伝」 河出書房新社 2009
- (4) Lacan, J. (小出浩之他訳)「精神分析の論理」 岩波書店 2002
- (5) Mayer, J.-E. : Depersonalisation und Derealisation. Fortschr. Neurol. Psychiat. 31 : 438, 1963
- (6) 木村敏 「自己・あいだ・時間」 弘文堂 1981
- (7) Oka, K. : Zur Psychopathologie der Depersonalisation. Nervenarzt. 77 : 823, 2006
- (8) Gabel, J. : La fausse conscience, Essai sur la reification. Minuit, Paris, 1962
- (9) 塚本嘉壽 「La fausse conscience. 物象化についての素描」 臨床精神病理 1 : 105, 1980
- (10) Schmidt - Degenhard, M. : Angst - Problem geschichtliche und Klinische Aspekte. Fortschr. Neurol. Psychiat. 54 : 321, 1986
- (11) Schmitz, H. : System der Philosophie. II-1 Der Leib. Bouvier. Bonn, 1982
- (12) Waelhens, A. de. (塚本嘉壽他訳)「精神病」 みすず書房 1994
- (13) Matussek, P. : Untersuchungen über Wahrnehmung. Arch. Psychiat. Nervenkr. 189 : 279, 1952
- (14) 中野美代子 「孫悟空の誕生—サル民俗学と『西遊記』」 玉川大学出版部 1980
- (15) Shoemaker, S., Swinburne, R. (寺中平治訳)「人格の同一性」 産業図書 1986
- (16) 新山喜嗣 「Capgras 症状と私の同一性—属性を欠如する『このもの性』の視点から」 臨床精神病理 22 : 129, 2001
- (17) 新山喜嗣 「Capgras 症状と可能世界—本物とにせものが存在する場所」 精神雑誌 106 : 281, 2004
- (18) Christodoulou, G. N. (ed.) : The Delusional Misidentification Syndromes. Karger. Basel, 1986
- (19) Kripke, S. A. (八木沢敬他訳)「名指しと必然性」 産業図書 1985
- (20) Kretschmer, E. (相場均訳)「体格と性格」 文光堂 1964
- (21) Glatzel, J., Huber, G. : Zur Phänomenologie eines Types endogener juveniler asthenische Versagenssyndrome. Psychiat. Clin. 1 : 15, 1968
- (22) Glatzel, J. : Denkstörungen bei endogenen juvenilen asthenischen Versagenssyndromen. Nervenarzt. 39 : 393, 1968
- (23) Ernst, M. (巖谷國士訳)「白頭女」 河出書房新社 1996

(24) DeLeuze, G., Guattari, F. (宇野邦一他訳)『千のプラトー』河出書房新社 1994